



TITLE:

<批評・紹介>明清時代商人及商業資本 傳衣凌著

AUTHOR(S):

寺田, 隆信

CITATION:

寺田, 隆信. <批評・紹介>明清時代商人及商業資本 傳衣凌著. 東洋史研究 1957, 16(2): 201-206

ISSUE DATE:

1957-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/148071>

RIGHT:

批評・紹介

明清時代商人及商業資本

傅 衣 凌

一九五六年七月・北京・人民出版社
B6版、二一六頁

こゝ數年來、中國の歴史學界において最も關心を持たれ、數多くの論文を生んだ研究テーマの一つに、中國における「資本主義の萌芽」と言う問題がある。それらの幾つかは、すでに「歴史研究」その他の學術雜誌や單行本によつて我々の目にも觸れているし、最近出版された「中國史の時代區分（東大出版會）に、田中正俊氏の詳しい紹介もあるから、もはや研究の對象として珍らしいものではなくなつてゐる。

たゞ、この萌芽なる概念は必ずしも科學的な内容を與えられてはいないように思われるけれども、それはそれとして中國社會において資本主義の萌芽が出現したのは、「明」の嘉靖・隆慶・萬曆時代と考へるのが普通のものであつて、この問題を追求する學者たちは、當時の中國社會が基本的にはまだ封建社會であつた事を認めつゝも、その中に言わば從屬的ウクライドと言う型でもつて新しい時代の胎動が見られたと考へ、それらの動きを主として、(一)土地の集中と階級分化、(二)農業生産、(三)手工業生産、(四)商人及び商業資本の活躍、(五)これらの條件の上に展開する新しい階級闘争と言う五つの方向からとらえようとする。

こゝに紹介しようとする傅衣凌氏も、このような考え方に立つ研究者の一人であつて、それに基いた研究報告も幾つか發表している。傅氏は現在廈門大學に籍をおき、すでに戦争中に「福建佃農經濟史叢考」を發表して以來、廈門大學學報・文史版に「明代江南地主經濟發展の初步研究」・「明代江南富戶經濟的研究」その他の諸論文を發表して、「明」の後半期に中國社會の内部に芽生えた新しい生産關係の問題に對して積極的な發言をして來たようである。この「明清時代商人及商業資本」なる一書は、傅氏の商業方面における見解を明らかにしたものと考へられるが、その後記に言うところによれば、こゝに収められた研究は、一部を除けば戦争終了後から解放までの數年間の勞作であつて、新しく一冊の書物として出版するにあつて若干書き改めはしたが、大部分は舊のまゝにしたと記されている。その内容を擧げておくと、

一、明清時代の商人及び商業資本發展の概述

二、明代の徽州商人

三、明代の江蘇洞庭商人

四、明代福建の海商

五、明代の陝西商人

六、清代前期の東南洋銅商

七、清代前期の廈門洋行

の七章から成つており、再び後記の文章によれば、これら七章の中に新たに書かれたのは第一章だけである。そこで今こゝにこの書物を紹介するに際しては、第二章から第七章までの部分は極く簡単に内容を記すにとゞめ、多くの部分を第一章のために削きたいと思う。それは與えられた紙數に制限があるからでもあるが、第一章には商

人及び商業資本の活動に客観的な條件を與えた中國社會に對する分析が行われており、傅氏が本書において追求したものは本來前期の商人及び前期の商業資本ではあつたが、それが著者の頭の中では常に新しい社會・生産關係との關連の上に考えられている以上、その部分が傅氏の立場を明らかにするのに最も便利なのではないかと思つたからである。

まず第二章であるが、こゝでは「明」から「清」にかけての中國經濟界の主導權を握つた徽州商人即ち有名な新安商人が取り扱われている。まずこの地方が多くくの商人を輩出した理由として土地が少く人が多かつた事、地主經濟の發展に伴ひ高額の租税負擔が農民を苦しめ、彼らを手工業方面へと追ひやつて手工業生産を盛んにした事、「宋・元」以來の中國經濟の發展により市場の開拓が行われ物資の移動も活潑になつた事、そして徽州は經濟的中心たる蘇・杭に近く、古くから人々は自らの手工業製品を販賣して商業上の經驗を持つていた事などを擧げている。徽州商人の營業物資として鹽・食糧・木材・絲棉・墨などが數えられる一方、典當業を営む者もあり「徽州」と云う惡名が生れた。又倉庫業を経営する者もいて、その全國的に廣い活動範圍とともに彼らの盛大な商業活動をしのはせる。このように徽州商人が指導的地位を占めるに至つた原因として、彼らが資金を死藏する事なく積極的に業務を擴張するために使用した事、彼らの商業道德がすぐれて高かつた事、それに活動範圍が廣かつた事を指摘する。又彼らの資本は多く宗族合伙の型をとるとともに大戸から貸りる事もしばしばであつたらしく、彼らの活動と郷族利益とは互に結びついていたとする。徽商は時には直接生産部門にも活躍する事もあつたけれど、それは例えば鹽業などの場合では政府の

礦稅収奪によつて發展を抑えられ、ために産業資本への轉化を妨げられたし、その資本は土地資本と結びついていて商業利潤を土地に投資する傾向を持ち、それが一層産業資本への轉化を妨害した。最後に徽商資本は官僚資本としての一面を持ち國家權力の消長とその盛衰をもにすることもあつたし、その資本は郷族の間に消耗される事も多くそれによつて封建農村の古い體制を維持する役割を演じた。かくて徽州商人とその活躍は封建社會に一定の分解作用を起したとは言ふものゝ、遂に新しい社會を生み出す力を持つに至らなかつたと結論する。なお直接これに對する研究として日本の學界は藤井宏氏の「新安商人の研究」を持つてゐる。

第三章は蘇州附近出身の商人について述べていて、この地方の商人の中には徽州商人とならぶ大商人となつた者があり、主として布商・典當業者として活躍したと言う。

續いて第四章には福建地方の海商が對象とされておゐり、外國商人の渡來をむかえて漳州・泉州などを中心に生絲——銀の貿易が活潑に行われ、若しこの貿易活動が封建勢力の妨害をうけなかつたならば、資本の原始的蓄積を行われたと想像する。このような福建の貿易商人たちの活動は遂に傳統の海禁政策を撤回させる事に成功し、商人の數も増加する一方、貿易の相手もヨーロッパ各國の商人から日本・朝鮮・南洋方面へと擴大して行つた。かゝる「明」代福建の海商とその資本とは「宋・元」時代のそれらにくらべると一段と進歩して自由商人の條件を持つていたけれども、やはり封建的地主官僚階級との關係は深く、その資本の多くは高利貸資本から出ておゐり、更にその經營方式からみると、それは牙商の型をとる者と、船主として自ら海外に乗り出す者とに分れる。しかしその中には出

資者として資本を貸し商人に貸與し地主階級のように一種の不勞所得をむさぼる者がいて正常な商人の成長を妨げていた。又商人の構成についてみても貧民出身者と、地主出身者やそれと密接な關係を持つ者との二種類があつて、商人・地主・官僚と言う三つの性質をあわせ持つ商人が最も有力な存在であつた點がヨーロッパの商人と違ふところであつて、それが中國の貿易商人が充分の發展を遂げえなかつた理由であるとしている。したがつて商人の理想は特權階級の中に首をつつこむ事であつて、その資本は甚だ封建的な色彩が強く、巨大な資本も遂に前期的な商業資本・高利貸資本の段階にとどまるのみで、産業資本へと轉化しなかつたと言う。

續いて第五章は陝西商人について、彼らの發展は廣大な農業地域を基礎としその豊富な資源によつて先ず農業上の蓄積によつて地方的な大商人となつた事を明らかにした後、その活動は北邊に糧餉を運び淮揚河東方面の鹽業に關係し布或いは茶の取引が主要な業務であつたとする。

以上の四章は「明」代をあつかつてゐるが、以下の二章は「清朝初期」にはいる。第六章には東南各省の銅商が取りあげられてゐる。それは中國經濟の發展に伴つて貨幣としての銅の需要が急増したが、その爲に外國特に日本から大量の銅を輸入する貿易にタッチした商人である。彼らには官商と民商の別があるが、乾隆以後日本における銅の産額が減少すると政府は統制を強化して、政府の完全な支配下に獨占的商人が登場する。なお終りにこれらの銅商と日本の特許銅商泉屋利兵衛―住友財閥の前身―とを比較した部分がある。

最後の第七章は廈門洋行の盛衰にふれ、その組織は所謂牙行制をとつており、「洋行」とよばれる組織を發達させた。又、その内部は

出資者と經營者に分れ多數の労働者を使用した事を擧げ、雍正・乾隆・嘉慶年間を最盛期とした洋行も、各商行の競争・港口が増加した事、イスパニア商人の來航が減少した事の影響をうけて、道光年間には殆どつぶれた。ついでアヘン戦争による公行獨占貿易制度の破壊によつて廈門洋行は完全に崩壊したと考え、著者はこの牙行的な洋行の没落に中國封建經濟解體の具體像を見ている。

さて以上のような分析の基礎であり同時にその總括として第一章が展開される。傅衣凌氏の考え方によると、こゝに取りあげられた「明・清」時代の代表的商人はいずれも前期的商人と理解されるべきものである。ところで中國における商人・商業資本の活躍は、すでに「史記」の時代にはじまつており、それが時代の経過とともにますます活潑化し、「宋・元」以後は封建經濟の發達、地主階級の奢侈生活、廣大な中國の人口が支える消費市場とその擴大、更に國內市場の開拓と云つた條件に支えられてその配備・機構も完成した。それが「明」代になると農業生産の發展・特に商品作物の栽培・農村家内手工業の普及と云つた現象、一方土地兼併の進行は多數の流浪的雇傭労働者を生むとともに社會的分業を促進した等の理由によつて商業は更に一段と發展したと考える。著者によれば當時の手工業生産はすでに一部は農家副業の枠を離れ、工場制手工業への道を歩みはじめたおり、かなり多くの市民階級も生れてゐたと言う。それに江南地方では一種の富農的な農業經營があつたとする。彼らは農業を一種の企業とみなし、地租の収奪のみを事とした傳統的な地主とは全く性格を異にするものであつた。そしてこれらの經營には農業労働者が雇われており、この點に著者は農業生産における資本主義的生產關係の萌芽を認め、この生産者と生産手段の分離の過程に

國內市場の形成をみるとともに、都市發展の一因を求める。もつともそれらは甚だ未成熟なものではあつたが。

このような條件の上に多數の商人が活躍し、先進的な地方には巨大な商業資本家が成長した。一方土地兼併に伴つて土地から切離された農民の一部も商人となつた。即ち中國の商人は、例えば新安商人など地租過重、土地不足、人口衆多の地方に生れており、彼らは土地の富豪から資本を借りて商業に従事したのであるが、この關係はその地方の封建的な土地關係を商業經營制度の中に持ち込んで、商業活動の一つの特色をなすとともにその限界をつくつたと考えられている。

さてこれら商人たちの利潤はどこから抽出されたのか。この點について著者は言う。當時の商人資本は商品賣買の豫付資本と商品運送・保管の預付資本とに分れ、資本の成長はいずれも小商品生産者の分化によつて支えられており、小商品生産者を壓迫・搾取する事によつて蓄えられたものであると。即ちそれらはいずれも流通過程の中で蓄積されたもので、農村の副業的手工業と定期市を利用する事によつて、商人は商品を集めるのに直接生産を支配しなくても充分その目的を達する事が出来たとみるわけである。したがつて商人たちは商業利潤を追求するだけで莫大な利益が約束されていたのであるから、自ら生産の領域にタッチする必要はなかつたと考えている。そしてこれらの現象は、農業と手工業の結合が商業資本の産業資本への移行を阻害し國內市場の形成を大幅に制限した事、一方商業自身も長期にわたつて封建制度に服務した事などからおこつたものと説明されている。

このような諸々の條件を考えた上で、著者は「明清」時代の商人及

び商業資本の特質を次のように説明する。即ちその一つは商業と農業が密接に結びついていたと言う事。それは商人の多くが農村から出ており、又小商人が大部分を占めていたから、彼らが富を蓄えたとすぐ郷里に歸つてその資本を土地に投じたり高利貸を営んだりして直接生産者たる農民を搾取した事に特徴的である。又それは中國封建社會をつうじて商業が地主階級の奢侈生活と廣大な人口の消費に支えられて發展したため、農業上の蓄積をも商業に投じさせ、兩者は互に助けあう關係が生じて商業と農業との結合を促進し強固にしたのであつた。そしてこのような關係の反映として商人仲間郷黨意識は強く、彼らは時として甚だ排他的な組織を持つていた。こうした郷黨意識は農村共同體關係の殘存物は商業上においては、國內市場の集中と擴大を助け、商人の資金の大半を郷族關係方面に浪費させ遅れた社會制度を維持する事になつてしまつたのであつた。

その二は商業と高利貸との關係が強かつた事。即ち當時の商業の中最も利潤の多かつた部門・例えば鹽商、洋商、茶商、絲商などの多くは、封建國家としての「明清」政權の庇護の下に經營されており、又その多くは高利貸的方式によつて經營されていたのである。と同時にその特權的地位を利用して生産者からは低廉な價で商品を買上げ、獨占的な價額で販賣する等、その商業資本の本質を暴露しているが、その典型的なものが牙行制であつたと述べている。

そして最後に「明清」時代の商人及び商業資本の演じた役割について、それが本質的には封建制度のために服務するものであり、その活躍の主要な面が流通の一面にとどまつたといへば、封建制度に對立する一つの力をその中に孕んでいたのを見逃してはいない。商人は封建的な政權と密切に結びついてはいたけれども、貨幣資本の

形成と集中を促進し、直接生産者たる小私有者を解體するといった作用を通じて封建社會を崩壊させ、資本主義の發展に對して若干の歴史的前提をつくり出したと結論する。著者は最後に毛澤東の言葉を引用して、こゝに取り扱われた一連の商人たちは中國資產階級の前身であつたと言つてゐる。

以上によつて一應本書の内容紹介を終えたいと思うが、本書の特徴はまず「明・清」時代の代表的な商人グループを對象としてその一つ一つの姿を明確に把握しようとした點にあるとみられる。しかもそれは中國における資本主義の生産關係の萌芽との關連の上に論じられてゐるのであつて、資本主義への前提條件をつくり出した一つの力としての商業資本の性格を明らかにするための一般的な考察が、色々な方向から行われていて、本書の持つその先驅的な意味は充分に認められなければならないと思う。それに著者は非常に廣範圍に史料を蒐集して、各篇の終りに補注としてその出典を明記されているのは非常に有難く、將來この方面を研究する人々には參考となる事が多いのではないかと考えられる。

たゞ本書は一種の論文集であつて、著者自身も認めているように全體的な方向としては一致してゐるとしても、その性質上個々の部分には若干の出入があるのは否定出来ないようであるし、その見解もすべて納得出来るものばかりではない。その前者については著者もいずれば何らかの形でそれを補われるであらうし、後者に對しては我々としては史實の具體的な分析の上にたち我々自身の理論的規定を提出する事によつて批判すべきであらう。したがつてその點については後日を期すとして、最後に一、二つけ加えておきたい。それは實證の問題ではなくむしろ實證された史實を歴史像としてどの

ように構成するかという理論的把握の方法につらなる問題として、前期的商業資本をどのように考えるかと云う事についてある。

傅衣凌氏は「明・清」時代の商人やその資本を前期的商人、前期的商人資本と考えてゐる。そしてそれらは氏の言の如く中國封建社會の發展、特に購買力として放出された封建的餘剩生産物を基礎として、市場關係の未成熟即ち等價交換關係の未成熟の上に利潤を追求するものであつた事は認めなければならない。とするならば、これらの資本がしばしば土地資本に改變されると言うのは、その性格から考えてむしろ當然の事と言ねばならない。何故ならば前期的資本は小農經營を維持しそれを取奪する事をよりどころとするものであり、資本蓄積の契機として、直接生産者たる農民との間に前期的な交換・給付關係、價格法則の貫徹しない價格差を利用するものであつたから。

著者はこの場合、商業と農業との結びつきを強調し土地關係の商業經營への反映、商人の鄉黨意識などを問題にするようであるが、それらは一の歸結現象であつて、その眞因は資本の性格そのものに求むべきであらう。したがつて中國では農業と手工業の結合が長期にわたつて商業資本の産業資本への轉化を妨げたという分析や資本の封建勢力への服務と言つた現象は、言うまでもなくかゝる資本の性格そのものから出てゐるのであつて、決して中國個々の現象ではないはずである。

それからもう一つ。本書では商業資本が本來の資本――産業資本に轉化しつゝあつた事に少し觸れているが、それは抽象的な結論としては恐らく正しいであらう。商業資本はその自己運動として封建社會を解體せしめる方向に作用するが、それは自らの存在條件をも否

定する事になるから、それに對する反作用の一つとして自ら質的變化をとげ、生産過程そのものを自らの営みの下にまきこむのである。傅氏も認めているとおり、前期的商業資本は一方において封建社會を培養基として貨幣財産を集積し、他方においては封建社會の基礎體制を締めつける事によつて自由な労働力を遊離し、資本家的生産様式成立の條件をつくり出すが、しかしこの條件の上に資本家的生産様式が展開するかどうかの決定條件は、生産過程の事情——手工業生産の發展の程度（質的・量的）の如何によるのであつて、この點の分析を抜きにして單純且つスムーズな資本の質的變化を想定する事は現象の記述にとゞまつて、その本質的な意味を見失う危険があると思うが、どうであらう。

（寺田隆信）

Le traité économique du "Soueï-chou"

Etienne Balazs, Leiden, 1953

唐代社會經濟史の專家で、つとにその勞作「Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte der 'T'ang-Zeit」を以て知られているバラシエ教授が、今また中國、中世に於けるその方面の基礎史料たる「隋書食貨志」をとりあげて、精密な譯解を「通報」(T'oung Pao vol. XLII, livr. 3-4)に連載した。こゝに紹介せんとするものは、これらの原稿が單行本の形にまとめあげられた一九五三年のライデン版である。

もつとも「隋書食貨志」のフランス譯としては、本書に先行してうでに故マスベロ博士にその未完成の遺稿があつた。しかしながらこの遺稿は、とびとびの翻譯を以て綴られると共に、テキストの半ばにも達しないという全くの草稿であつた關係上、できればこれを

補修完結して上梓したいというドゥミエヴィーユ氏 Paul Demiéville の委託にもかゝらず、バラシエ教授は遂にこれを斷念し、結局まつたく別個な譯解を本書の體裁で完成することにした。「……從つてこの翻譯に關する責任はすべて自分にある」と氏は特にこゝとわつてゐるのであるが、この言葉の中にこそマスベロ博士の遺稿に満足しきれなかつた著者の自信がおのずから滲みでているのである。確かにこの自信は、第三者の立場からしてもその相應しさを否みえないであらう。それというのも「隋書の經濟篇（『食貨志』）という本題に副えて、「中國中世における經濟・社會の研究」とサブタイトルがわざわざ附されているところからも判るように、本書は決して單なる史料『隋志の翻譯に終始する著作ではなかつた。從つて譯文の正確さに加えて特殊研究を以てするという充實さが、實に著者のこの自信を裏附けているからである。

本書の内容構成は、その第一篇がまず隋書の由來を説明しつゝ食貨志の史料の價值を論じ、延いて中世社會經濟史の重要問題の提起に及ぶ序論を以て充てられる。次でテキストの翻譯を以てする第二篇、さらに引續いて分量的にはそれを凌駕する二百五十の譯註からなる第三篇、そして最後に「六鎮の叛亂と北魏の分裂」より以下「北魏およびその後繼諸王朝の軍隊組織」・「北齊の田制に關する文獻」・「蘇綽の六條詔書」・「中世文藝の統計目錄（『經籍志』について」・「七世紀初頭の州縣と人口に關する記錄（『地理志』）」・「六世紀における重大事件の對照表」の七特殊研究を附録とする第四篇が配せられている。本書のもつ學問的價值の重點は、こゝに於て自らその所在を明かにするのであつて、從つて紹介者としての筆者の立場もまたこの性格に沿わねばならない。